『敦煌寫本研究年報』第十四號（2020.03）109-117 頁

說“歹”*

高田時雄

一、はじめに

敦煌寫本を眺めているとしばしば“歹”という文字に遭遇する。吐蕃官員の名を中心として、吐蕃期の敦煌住民、更には歸義軍時期の人名にも見えるもので、本來チベット語の stag（虎）を表わす音寫語「悉歹」の後半部分に出現する。普通のテキスト中には例がないので、音寫專用字として用いられたものと見られる。しかし、この文字については、その字形と字音をはじめ、文字の成り立ちに關して、必ずしも定說がないようなので、小文によって卑見を述べてみたいと思う。

二、出現例

stag は唐蕃會盟碑などの碑銘や正史では一般に「悉諾」と音寫されている。以下に幾つかの例を、對應するチベット語とともに擧げてみよう。

尙旦熱悉諾帀（唐蕃會盟碑北面第 31 行） Zhang Brtan-bzher-**stag**-tsab
論悉諾熱合乾（唐蕃會盟碑北面第 35-36 行）Blon **Stag**-bzher-hab-ken
論悉諾昔乾窟（唐蕃會盟碑北面第 37-38 行）Blon **Stag**-zigs-rgan-khal
論悉諾息（舊唐書卷一九六吐蕃傳上[1]） Blon **Stag**-zigs
悉諾邏恭祿（舊唐書卷一九六吐蕃傳上[2]） **Stag**-sgra-khong-lod

唐蕃會盟碑は言うまでもなく、長慶元年（821）から二年（822）にかけて唐と吐蕃のあいだに締結された盟約を刻したもので、第一級の同時代史料である。そこに用いられた音譯語は文字の選定に當たっても十分な吟味が爲されている筈で、

*小文は JSPS 科學研究費基盤研究（B)「中國典籍日本古寫本研究の精密化と國際的情報發信」（25244015、研究代表者：道坂昭廣）による成果の一部である。
[1]新唐書卷二一六吐蕃傳上も同じ。
[2]同上

對音を研究する上で決定的に重要なものである。上には會盟碑の北面に刻された吐蕃官員列名から stag の含まれているものを拾い上げた[3]。また『舊唐書』が據った原資料も必ずや同時代の中央で作成されたもので、兩者には一貫した原則が貫かれていたと見るべきである。このように唐代の公式文書ではすべて「悉諾」と書かれていることが分かる。

ところでこの「悉諾」という用字は、實は以下のように敦煌寫本にも觀察される。

論悉諾囉（S.2729「僧尼牌子曆」）Blon **Stag**-sgra
論悉諾息（S.5812「丑年令狐大娘訴狀」）Blon **Stag**-zigs
悉諾邏（P.2555 竇昊「爲肅州刺史劉臣壁答南蕃書」）**Stag**-sgra
論悉諾藺宗（P.5037 竇昊「肅州刺史答南番書」）Blon **Stag**-rin-zung

P.5037 は、P.2555 と同一テキストで、開始部分のごく一部を保存するだけの斷章である。P.5037 には「論悉諾藺宗」と書いてあるが、P.2555 では「論悉藺琮」と書かれ、「諾」字が漏れており、また「宗」を「琮」に作っている。しかしこれが同一人物であることは確實であり、stag を寫す部分は正しくは「悉諾」と書かれるべきことも明らかである。ただし「藺宗」二字で表されたチベット語が何であるかという點になるとよく分からない。ここでは假に Blon Stag-rin-zung としておいたが[4]、確かではない。竇昊の「答南蕃書」では、この人物は吐蕃の和使となっているが、敦煌チベット文獻中にはこの形では現れない。おそらくこの原語比定には誤りがあると思われる。ともあれ、當面の課題である「悉諾」＝ stag には關係しないので、ここでは深入りしない。

しかるに敦煌寫本には、吐蕃官員名中の stag を音寫するにあたって、「悉諾」ではなく「悉殌」を用いる例も存在している。

悉殌勃藏（S.542v(4)「戊年沙州諸寺丁壯車牛役部」）**Stag**-bzang
論悉殌夕（S.3287v(1)「子年擘三部落戸口手實」）Blon **Stags**-zigs
論悉殌乞里悉去囉（P.2449v「吐蕃期願文」[5]）Blon **Stag**-khri-sgra

[3]原拓本は京都大學人文科學研究所所藏拓本により、公刊されたテキストとしては、Fang-kuei Li, The Inscription of the Sino-Tibetan Treaty of 821-822, *T'oung Pao*, Vol. 44, Livr. 1/3 (1956), p.36; 佐藤長『古代チベット史研究』下（京都：東洋史研究會、1959 年 10 月），902 頁，H.E. Richardson, *A Corpus of Early Tibetan Inscriptions*, London: Royal Asiatic Society, 1985, p.141; Kazushi IWAO, Nathan HILL, Tsuguhito TAKEUCHI (eds.), *Old Tibetan Inscriptions*, Tokyo: Research Institte for Languages and Cultures of Asian and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 2009，pp.39-40 等を參照した。Richardson のテキストには漢字が用いられていない。いずれにせよ關連部分のテキストについては大同小異である。

[4]鄧小南「＜爲肅州刺史劉臣壁答南蕃書（伯二五五五）＞校釋」，『敦煌吐魯番文獻研究論集』，北京：中華書局，1982 年 5 月，600 頁、注 3 に據る。

[5]Cf. P. Demiéville, *Le concile de Lhasa*, Paris: PUF, 1952, pp.239-246.

以上三名のうち最後の「論悉殆乞里悉去囉」は文書中に繰り返し現れ、瓜州節度使と明記されている。また「論悉殆夕」は上掲の「論悉諾息」と同じ人物であるに違いない。とすれば、この人物は『舊唐書』吐蕃傳に「時吐蕃遣使論悉諾息等隨元鼎來謝」とあるように[6]、長慶會盟のあと唐の使者劉元鼎に隨行して長安に至った吐蕃の使節である。該文書 S.3287v(1) には“論悉殆夕來日”とあって、沙州の行政官となったことを窺わせるから、もし同名の別人でないとすれば、使節となる前に沙州に在勤していたのである[7]。英藏チベット文獻 IOL Tib 915 に見える漢文文書斷片にも“論悉殆席來日”とあり、この「論悉殆席」もまた同一人物と思われる。最初の「悉殆勃藏」には「論」が付いていないが、下に「卿」があるので、他の二名と同じく吐蕃の高級官員であることが推測される。文書中では徵發された住民たちがこの人物のところに草を運んでいる。要するにこれら三名はすべて吐蕃官僚であるとみなしてよい。注意されるのは、これらの吐蕃官員の名を表記するに當たって、一方では「悉諾」を用い、一方では「悉殆」を用いているという點である。その違いはどこに求めるべきであろうか。

それに回答する前に、もう少し用例を見てみよう。「悉殆」の使用は、吐蕃期の吐蕃官員の名を寫すだけではなく、一般の敦煌住民の名前にも現れるのである。以下には管見に入ったものだけを掲出することとするが、網羅的に集めればさらに數多くの例を見出すことが出來るはずである。

1. 康悉殆　P.2964v「巳年（837?）二月十日令孤善奴便苅麥價契稿」
2. (吳)[8]悉殆終　P.3730v(7)「未年（839）四月紇骨薩部落百姓吳瓊嶽便粟契」
3. 張悉殆忠　P.3418v「敦煌諸鄉缺枝人戸名目」
4. 氾悉殆鷄　P.3418v「敦煌諸鄉缺枝人戸名目」
5. 陰悉殆力　P.3418v「敦煌諸鄉缺枝人戸名目」
6. 鷄悉殆　P.2155v「曹元忠致回鶻汗狀」
7. 悉殆潘　P.2856v「乾寧二年（895）營葬僧統牓」
8. （康）悉殆都　P.3753(3)「敦煌鄉百姓康漢君狀」
9. 悉殆没藏　P.4640v「己未年至辛酉年（899-901）歸義衙內破用紙布曆」
10. 劉悉殆咄　P.4640v「己未年至辛酉年（899-901）歸義衙內破用紙布曆」
11. 郭悉殆忠　P.4989「沙州安善進等戸口田地狀」
12. 郭悉殆心　P.5038「丙午年九月一日納磨菓人名目」

[6]『舊唐書』卷一九六下「吐蕃傳下」、北京：中華書局、1975 年 5 月、5266 頁。

[7]藤枝晃氏は「外交官となる以前に、あるいは外交官として、沙州に駐在もしくは出張したことがあったのであろう」とする。藤枝晃「吐蕃支配期の敦煌」、『東方學報・京都』第 31 册、1961 年 3 月、216 頁。

[8]姓氏は同一文書中に見える親屬の姓氏によって補った。下の（康）も同じ。

13. 彭悉殆　S.2894V(7)「社邑名單（973）[9]」

各文書の書寫年代は不明なものも少なくないが、1, 2 が吐蕃末期である以外はすべて歸義軍期であると考えられる。したがって「悉殆」の出現は時期的にはかなり長期に及んでいるが、上で見たような吐蕃官員ではなく、すべて一般住民であることは注意されてよい。6 の鷄悉殆[10]、9 の悉殆没藏は漢人名ではなく、とくに後者はチベット人らしい名前だが、他の漢人と同様に缺枝人戸の一として數えられているから、敦煌の住民であるとみなして差し支えなかろう。すなわちこれらの人々は stag を人名（或いは人名の一部）に用い、しかも tag 部分の音寫に「殆」字を使用していることが確認できる。チベット語の stag を名付けに用いること自體は、吐蕃期に漢族社會が蒙ったチベット文化の影響の一であると考えられるが、それがずっと後の曹氏歸義軍期にまで及んでいることは興味深い。そして「悉殆」という文字遣いもまた廣く受容されたものらしい。

三、諾から殆へ

チベット語の語詞 stag を音寫するのに、敦煌寫本中には二種類の表記すなわち「悉諾」と「悉殆」とが見られた。前者は吐蕃中央の高級官員の名に見られ、長安の權威ある音譯に由來していると思われる。一方、瓜州節度使をはじめ吐蕃期の河西に駐在した官員、さらに吐蕃期から歸義軍期にかけて長期にわたり觀察される敦煌の漢人人名には例外なく後者が用いられている。一般住民の名前には「悉諾」はまったく見られない。これは敦煌で實際にチベット語に接した結果として、音寫に用いる文字も聞こえの上でより近い「悉殆」に置き換えられたものと考えられる。stag の tag 部分を音寫するためには當然、鐸韻端母の文字を用いるのが理想的であるが、たとえば『韻鏡』などを見ると、この窠には○が記入されており[11]、いわゆる「有音無字」であることがわかる。適當な文字が手近に見當たらなかったればこそ、中央の音譯字でも「諾」字を用いざるを得なかったのである。鐸韻泥母に當たる「諾」字は古く『切韻』時代には*nâk であったが、この時期には脱鼻音化によって*^{n}dâk となっており、かろうじて stag を表現することができた。しかしながら tag を寫す文字としてはどうしてもぎこちなさが感じられたであろう。

[9]この「名單」の前後には壬申年（973）の轉帖などが書かれているので、同年のものと考えられる。

[10]この人物は曹元忠が甘州回鶻可汗に宛てた書狀に「肅州家一鷄悉殆作引道人」として見え、肅州在住で歸義軍の派遣した使者の案内人を勤めたことが分かるが、その族種については明らかではない。あるいは回鶻であろうか。

[11]『韻鏡』第三十一轉、諸本みな同じ。

ここに新しく*tâk 音のために新しい文字が作られることになったのである。この字が吐蕃期以前の寫本に現れないのは、新造の文字だからである。

もっとも鐸韻端母の文字がまったく存在しなかったわけではない。『集韻』には「沰」[12]小韻があり「當各切」の反切を與えている。これはまさしく鐸韻端母字である。この小韻には「沰」以外に「矺」字も見える。前者には「滴也」、後者には「碰也」の釋義を與えるものの、一般には用いられない僻字であることはいうまでもない。國會圖書館所藏の永祿七年刊本『韻鏡』では、鐸韻端母の位置、○のうえに手書きで「沰」字が書き込まれているのは、別に據るところがあって補記したものであろう[13]。

この文字は一般の字書には見えないために、これまで敦煌寫本の錄文を作るに際して、しばしば他の文字に誤讀されたのは致し方ないところである。上に擧げた P.2449v の「論悉殌乞里悉去囉」にしても、藤枝晃教授はこれを「悉殉」と釋し[14]、黃徵・吳偉編校『敦煌願文集』は「悉約」と讀んでいる[15]。この文獻を最初に紹介したフランスのドミエヴィル氏は、この文字を正しく「悉殌」と書いているが[16]、後の學者の採用するところとならなかった[17]。もっともドミエヴィル氏は、字形そのものは正しく書き寫したものの、これが如何なる文字であるかについては正しい結論には到達し得なかった。同氏は『字彙』に「殌、舊藏作弘」とあるのを引いて、この文字を「弘」の異體字と解釋したのである[18]。

ところで『字彙』が「殌」字を收錄して、「舊藏作弘」とするのは、遼僧行均の編[19]になる『龍龕手鏡』に基づくものである[20]。この字書は佛典に用いられた異體

---

[12]「沰」字は實は『廣韻』にも見える。それは鐸韻透母字（他各切）で「赭也又矺也」と釋されている。「赭也」の訓釋は、『經典釋文』が『詩・秦風・終南』「顏如渥丹」の「丹」字を『韓詩』では「沰」字に作るとするのに據っている。また「矺也」はすぐ下に見るように、『集韻』で「矺、碰也」とするものの同源字であろうか。とすれば聲母が若干異なっている。

[13]『通志七音略』はこの窠に「沰」字を置いてある。長澤規矩也『和刻本漢籍分類目錄 增補訂正版』（東京：汲古書院、2006 年 3 月）によれば、『通志七音略』には享保年間の和刻本があり、『韻鏡』の對校に用いることは不可能ではなかった。また直接『集韻』によって補記した可能性も否定できない。しかし江戸時代に廣く行われた釋文雄『磨光韻鏡』（初刻本は延享元年、1744）が「沰」字を補っているのに據ったと考えるのがもっとも眞實に近いように思われる。

[14]上掲藤枝晃「吐蕃支配期の敦煌」、217 頁。

[15]黃徵・吳偉編校『敦煌願文集』、長沙：岳麓書社、1995 年 11 月、682、684-5、750 頁。

[16]P. Demiéville, *Le concile de Lhasa*, p.240.

[17]藤枝教授は、上掲論文でわざわざ注記して「「殉」を同氏（ドミエヴィル）は「殌」と寫す。從い難いので敢て改めた」と言っている（289 頁注 21）。

[18]P. Demiéville, *Le concile de Lhasa*, pp.240-241. ただドミエヴィル氏は、『字彙』の字釋が不明確であると言っているから、多少の疑問を持っていたのかも知れない。

[19]沈括『夢溪筆談』「幽州僧行均集佛書中字爲切韻訓詁、凡十六萬字分四卷、號龍龕手鏡。」『四部叢刊續編』景明刊本、卷十五、第三葉。

[20]卷第四、「歹」部第廿二。

字を多く收錄することで著名だが、「舊藏」が何を指すものであるかはよく分からない[21]。『手鏡』は宋に傳わったのち、宋諱を避けて『龍龕手鑑』と改題したが、內容に大きな變更はないようだ。『手鏡』は遼刻原本に據った高麗版があり[22]、宋版の『龍龕手鑑』もある[23]。これらは四卷本だが、朝鮮で增廣された八卷本も存在する[24]。しかしいずれの本も「歘、舊藏作弘」に作っており、直接か或いは他の書物に據ったかはともかく、『字彙』の字解は『龍龕手鑑』に由來するものであることが分かる。金代の邢準『新修絫音引證群籍玉篇』[25]は『上元本玉篇』（孫强增字本、上元元年（674）成書）を基礎とし、當時參照することが出來た樣々な字書韻書を用いて增廣した本で、その卷第十一「歘」部にやはり「歘」字を收め、「舊藏音弘」と解說する。これが『龍龕手鑑（鏡）』に基づくものであることは、それを示す記號によって明らかだが、邢準が用いた本は『古龍龕』と稱し、高麗本や宋本にくらべても古態を留めるもののようである[26]。したがって、『龍龕』以降の字書にこの字が見えるのは、管見の限りでは、本書が最初ということになる。『康熙字典』は出典を『字彙』と明記している。結局、「歘」は、『龍龕』が初出で、しかもこの字を收錄する字書の類はすべてそれを襲っていることになる。現代の『漢語大辭典』が『龍龕手鑑』を出しているのは、さもあるべきやり方である。しかしながら、敦煌寫本の人名表記に用いられるこの文字が『龍龕』のいう「弘」字であり得ないことは勿論であって、その成り立ちを考えるには敦煌寫本そのものから出發するほかはない。

[21]『龍龕手鏡』の成書は契丹の統和十五年（997）とされ、この頃にはまだ契丹藏は刊刻すら始まっておらず、契丹藏に先立つ宋の開寶藏を「舊藏」と呼ぶ筈はない。したがって舊藏というのは、當時行われていた寫本藏經の一であったと思われる。

[22]昭和四年（1929）十月の京城帝國大學法文學部影印本があるが、卷二（上聲）を缺く。1985 年 5 月の中華書局版は、この本に依據しつつ、缺けた卷二を『四部叢刊續編』本（底本は傅氏雙鑑樓藏宋本）で補う。

[23]宋版としては毛氏汲古閣本及び江安傅氏雙鑑樓本があり、それらを底本とした各種影鈔影印本が流布する。

[24]朝鮮本は日本國內には內閣文庫や龍谷大學などに所藏が確認されるが、日本元和年間の古活字版も存在する。八卷本では卷第八の「歘」部第廿三に見える。

[25]1995 年、北京圖書館出版社景印金刻本、中華再造善本之一。

[26]楊正業「邢準《新修篇海》文獻價値論（代總序）」によれば、『新修絫音引證群籍玉篇』卷末に附した「龍龕雜部」所收の字數は 394 字しかなく、高麗本や宋本（楊氏は四庫全書本を用いるが、その底本は浙江吳玉墀家藏本）よりかなり少ない。楊正業、馮舒冉、魏現軍、楊濤輯校『古佚三書』（《上元本玉篇》《韻》《小學鉤沈三編》）、成都：四川出版集團・四川辭書出版社、2013 年 3 月。

四、「歿」字の成り立ち

上で見たように、「歿」字は、しばしば敦煌住民の名前の一部として現れるから、社會で一定の認知を受けていたと思われる。ただしそれは基本的に「悉歿」を構成する要素に過ぎず、單獨で見ることはできない。BD9520v「癸未年王歿敦貸生絹契」に「王歿敦」という名が見えるが[27]、おそらく「王悉歿敦」の「悉」字を書き落としたものであろう。あるいは簡略表記として「歿」一字で書くこともあったかも知れない。

第二節で取り上げた一般住民の氏名が實際にはどのように書かれているかを見るため、以下に原寫本から切り出した畫像を掲げておこう。

1　2　3　4　5　6　7

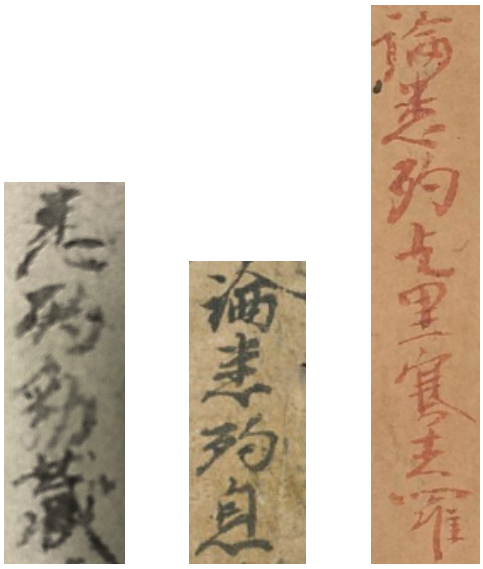
8　9　10　11　12　13

圖 1：一般住民の氏名に見える「悉歿」

比較的楷正に書かれたものもあるが、多くは草率になぐり書きされたもので、1などはほとんど木偏に見える。文字の構造を知るには不便が多いが、おそらくこの文字はもと「歹」と「勺」とから成り立ったもの、すなわち「歿」であると考えるのが妥當だと思われる。というのは、吐蕃期の官人名を書いた文書では、この偏と旁がはっきりと見て取ることが出來るからである。成立の最初は「歿」で

[27]馮培紅「法藏敦煌文獻 P.2504 Pièce1–4 攷釋」、本誌本號 33 頁。

あったものが、時を經るにしたがってかなり適當に書かれることも次第に増えてきたのである。



S.542v　　S3287v　　P.2449v

圖 2：吐蕃官人名の「悉殂」

圖 2 に見るとおり、吐蕃官人名を書いた「悉殂」の「殂」は「歹」と「勺」から成っているが、造字法として、これは果たして「歹」偏に「勺」を配した形聲字であろうか？「歹（歺）」は『說文解字』に「剢（列）骨之殘也」（肉を削ぎ取ったあとの骨）とし、この部首に從う文字には「死」をはじめとして「殂」「殉」「殯」「殄」「殲」「殃」「殤」など甚だ緣起の惡い文字が竝んでいる。新しい文字を造るに當たって、しかも名前に用いる文字に、わざわざこのような部首を選ぶというのは不可解である。また形聲字だと假定して音符に當たる「勺」は、『廣韻』市若切、藥韻禪母字（*źiâk）であって、等位を別にすれば韻母こそ同一だが、聲母は全く異なっている。その字音は目標となる鐸韻端母（*tâk）からは相當の距離があると言わねばならない。このままでは、stag の tag を表記する文字として造られたとするには違和感がある。

あるいはこの文字の「歹」はもと「多」字の一部或いは省體なのではなかろうか。敦煌遺書など見える「多」字には確かに「歹」に似たものがある。下の圖 3 は敦煌寫本に日本寫本の一例を加えて、「多」字の省體と見るべきものを拾い出してみた。敦煌寫本ではもちろん多くが「夕」を上下に重ねた正體の「多」を用いているが、草率に書かれた寫本には上下が合體して、あたかも「歹」のように見えるものがある。もしこの假設が正しいとすれば、「多」は『廣韻』得何切、歌韻端母字

（*tâ）であり、それに「勺」を加えて連讀すれば、まさに鐸韻端母字の*tâk 音を作り出すことが出來る。つまり「夕（多）」tâ ＋ 「勺」 źiâk → 「殀」tâk である。ちなみに圖 3 の最後に出した『後愚昧記』は、日本の公卿三條公忠（1324-1383）の日記で、この文字は永和二年（1376）の自筆寫本から採錄した。日本の片假名「タ」は「多」字の省畫されたものであり、こうした省體の「多」字が基礎となっている。すこぶる時代は下るが、參考として擧げておいた[28]。

P.2738v　P.3418v　P.3826v　P.4706　後愚昧記

圖 3：寫本に見える「多」字の形態

したがって「歹」と「勺」とが反切上下字となって「殀」の讀音を作り出しているわけで、「甭」「您」などと同じく、反切造次法[29]によったものと見ることができる。もちろんこのような造字法は六書の埒外にあるもので、正統的な考え方からすれば極めて例外的な文字構成法と思われるであろう。しかし邊陲にある敦煌の、しかも民間の所爲であってみれば、六書など眼中にあろうはずはない。あくまでチベット語詞 stag を寫すための便宜的な文字なのである。それならいっそ「多」あるいはその省體の「夕」と「勺」を合體させた文字にすれば好いのではないかという疑問も生じるかもしれない。しかし、その含義はともかくとして、部首としてはより普通に用いられる「歹」のほうが、すくなくとも形の上では受け入れやすいということがあったのであろう。「多」の省體が「歹」に酷似しているという條件も、それを後押ししたであろう。

（作者は復旦大學歷史學系特聘教授、京都大學名譽教授）

[28]この字形は、東京大學史料編纂所提供「電子くずし字字典データベース」から拾った。http://clioapi.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/ZClient/W34/z_srchDo.php。

[29]反切造字法は、造字法として決して一般的なものではないが、その存在と效用は無視し得ない。張人石「反切造字法初探」、『邵陽學院學報（社會科學）』第 2 卷第 3 期（2003 年 6 月）、116-117 頁；李敬「試論反切既是注音法也是造字法」、『安徽文學』2007 年第 8 期、119-120 頁、などを參照。